

上海日本人学校浦東校における道徳の評価方法の確立

前上海日本人学校浦東校教諭

北海道沙流郡日高町立富川小学校教諭 遠藤 久仁

キーワード：在外教育施設、上海、特別な教科「道徳」、評価方法

1. はじめに

私が派遣された上海市は、鹿児島県とほぼ同緯度にあり、年間を通じて暖かい地域である。夏場は、40℃近くまで上がることもあるが、冬場は氷点下まで下がることはほとんどない。そのため、雪が降ることもほとんどなく、積雪状態になることは数年に1度である。

そのような環境下で3年間、充実した日々を過ごした「上海日本人学校浦東校」は、上海にある日本人学校2校のうちの1校である。上海市内を流れる「黄浦江」で分けられた「浦東地区」側にある浦東校は、小学部と中学部、高等部を設置している世界で唯一の日本人学校である。人工芝運動場や屋内温水プール、武道場や2つの体育館を所有し、そこで1100名を超える児童生徒が学んでいる。

小学部の教員として3年間勤務し取り組んだことの中から、平成30年度から行われている特別な教科「道徳」の評価方法について、浦東校小学部としてどのように評価するか、保護者にどのように伝えるか等、評価方法を確立するまでの流れを紹介したい。

2. 道徳の評価方法の確立

(1) 特別な教科「道徳」の研修（平成29年7月）

小学校では平成30年度から、中学校では平成31年度から特別な教科「道徳」の評価が始まった。浦東校では、平成28年度の研究内容として道徳を行っており、それを深化させるために、平成29年度も道徳の研究を継続することになった。

そのため、授業内容の改善や評価方法の理解を深めるために、特別な教科「道徳」の学習指導要領解説の編集に携わった、元文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官である赤堀博行教授（帝京大学大学院）を日本から招聘し、講話を伺った。

その中で、特に印象深かったのが「道徳における評価は、道徳科の授業を行った結果として見られた学習状況や道徳性に係る成長を見るものであるため、授業の中で見られた発言や記述などを基に評価を行うことになる」ということである。あくまで、道徳科の評価は、「その授業内でのもの」ということであり、普段の生活から見えた子ども達の道徳的実践については、「行動の記録」や「総合所見」に記載するという。これは、多くの先生方が間違っ理解していた部分であり、これをしっかりと確認した上で評価方法を確立させる必要があると考えた。



赤堀氏作成のスライド

(2) 評価方法の土台作成 (平成 30 年 3 月)

平成 30 年度の方針が決まり、浦東校の小学部として、

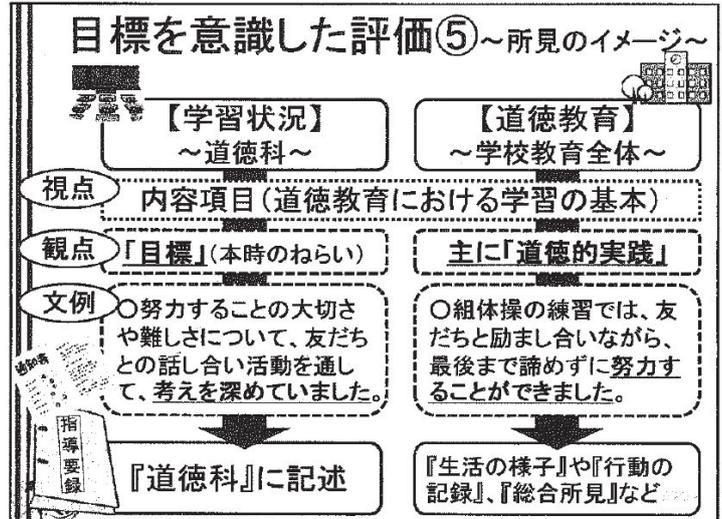
「道徳科の評価は文章による評価を行い、毎学期末に発行する通知表に記載する」

ということが決定した。

そのため、主担当である私が作成した土台を元に、各学年の道徳担当者を集めて、見直しをかけた。その中で大切にすることは、

「児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。」(小学校学習指導要領解説「第3章 特別の教科 道徳」の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の4)である。

そのため、保護者に伝える文言には、「児童の学習状況」と「道徳性に係る成長の様子」を明記することを決めた。



(平成 29 年度北海道日高管内道徳教育研修会資料より抜粋)

(3) 評価の視点を明確にする

道徳科の評価をする上で、職員間でぶれが生じないようにするために、小学部会の場を借りて、小学部の教員全員で学習会を行った。

○個々の内容項目ごとではなく、大きくりのまとまりを踏まえた評価とする。

○他の児童との比較による評価ではなく、児童がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として行う。

○学習活動において児童がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分との関わりの中で深めているかといった点を重視する。

○道徳科の学習活動における児童の具体的な取り組み状況を一定のまとまりの中で見取ること。

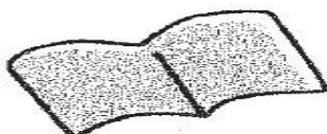
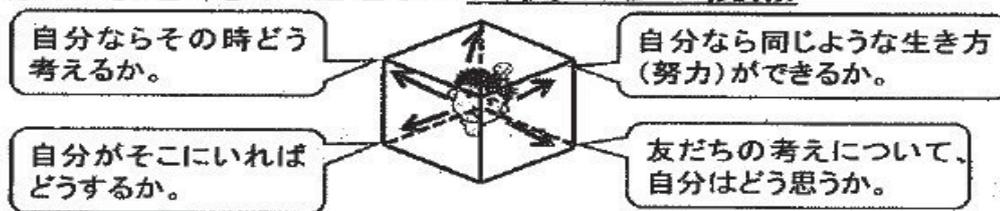
その中で、評価の視点として重視しているのが以下の2点である。

- ①物事を多面的・多角的に考えることができたか。
- ②自己の生き方についての考えを深めることができたか。

多面的な思考～主として外側からの視点～



多角的な思考～主として内側からの視点～



『生き方』(内面的自覚) ～自己理解の一層の深まり～

教科書から離れて・
教科書を通して

今までに自分は目標に向けて努力したことはあったかな。

これから自分にはどのような努力ができるかな。

今までに自分は努力ということに対して、どういう考えをもっていたかな。

(平成 29 年度北海道日高管内道徳教育研修会資料より抜粋)

(4) 本校の評価方法の決定

以上を踏まえ、本校では「学習状況の様子」と「道徳性に係る成長の様子」を以下の視点で評価し、それを記述することにした。(100 字前後)

- 「学習状況の様子」→子どもが実際に書いたり、話し合ったり、発表したりする姿を評価の根拠にする。
- 「道徳性に係る成長の様子」→子どもが見せた成長の姿を言葉で表現する。

(例:「自分とは異なる価値観を受け入れていた」「ある行動のよさに気づいた」)

<具体的な記述文例>

・「学習状況の様子」⇒以下の文例から選択

- 主人公と自分を重ね合わせて考えることができました。(25 字)
- ワークシートに自分が考えたことをしっかりと書いています。(28 字)
- 友達の見解を参考に、自分の考えを深めていました。(24 字)
- 友達の見解にもうなずきながら聞いていました。(22 字)

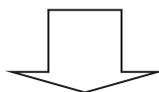
・「道徳性に係る成長の様子」⇒「特に」で文章をつなぐ。

(例)

- 特に「友情」について考える授業では、「すべてを正直に言うことだけではなく、相手を見守ることも友情には必要だ」と発言し、友達を思う気持ちが育ってきています。(78 字)
- 特に「思いやり」について考える授業では友達の見解を聞くうちに、手助けするだけではない様々な思いやりの形に気づきました。(59 字)
- 特に「誠実」について考えていく中で、「自分の心にうそをつかない」という自分なりの結論にたどり着き、これからの生活に生かしていこうとする記述がみられました。(78 字)
- 特に「正直」について考える授業の最後に、自分が教材の登場人物と似た経験をした時に、勇気をもって謝ったことを発表し、みんなに拍手をされていました。(72 字)

●特に「感謝」について考える授業の中で、「自分はこうするな」と自らの経験と照らし合わせながら考え、みんなの前で発表していました。(64字)

※具体的な記述するために、内容項目を入れる。



①主人公と自分を重ね合わせて考えることができました。特に「友情」について考える授業では、「すべてを正直に言うことだけではなく、相手を見守ることも友情には必要だ」と発言し、友達を思う気持ちが育ってきています。(103字)

②友達の意見にもうなずきながら聞いていました。特に「誠実」について考えていく中で、「自分の心にうそをつかない」という自分なりの結論にたどり着き、これからの生活に活かしていこうとする記述がみられました。(100字)

(5) 所見の見直し

1学期の道徳所見を作成した後、各学年の道徳担当者から所見作成時に出た課題を集約してもらい、2学期の道徳所見作成時に活かせるようにした。

<課題としてあがってきたもの>

○「学習状況の様子」を表す文例を増やして欲しい

→学習状況を想定し、新たに作った文例を7つ増やして11個の中から選択するようにした。

○所見例の共有

→各学年の道徳担当者がA～Dの4つの視点1つずつ作成し、それを道徳フォルダに保管。いつでも見られるようにした。

○文例集の作成

→「『道徳の評価を始めた初年度である』ということ」を踏まえ、今年度作成したものが次年度以降見直しをかけずに活用するようでは、この1年の研修が活かされないと考え、文例集は作成しないことにした。

その後、平成31年度も定期的に見直しをかけられながら、この方法で道徳科の評価をすることが継続されている。

3. 終わりに

「どのような方法で道徳科の評価をしたらよいのか？」という思いから、資料探しが始まった。前年度の講話の資料、原籍校の学校長に連絡を取り、資料をメールで送ってもらった。その上で「浦東校小学部としての評価方法」を考えることができた。これも、常に学ぶ意欲が高い小学部の教員、協力的な各学年の道徳担当者のおかげである。

「学ぶ意欲」があれば、何歳になっても、どのような立場でも成長することができる。道徳科の評価方法を作成しながら、そう感じた3年間であった。